

完璧御曹司の年の差包囲網で
甘く縛られました

冬野まゆ
Mayu Touno

目次

完璧御曹司の年の差包囲網で甘く縛られました

5

書き下ろし番外編

三年後の今に

301

完璧御曹司の年の差包囲網で

甘く縛られました

プロローグ

建築部第三課

浅葉 里穂

株式会社時ノ杜設計

代表取締役 時枝 雅近

本日付にて建築部第三課の任を解き、明日より特別企画部の勤務を命じる。

出勤するなり、壁に掲示されている辞令に自分の名前を見つけ、里穂は目を丸くする。
「やってもうたな」

自分の隣で落胆のため息を漏らすのは、同期で友人の加納いずみだ。

「これって、私への嫌がらせだと思おう？」

辞令を指差し、里穂が聞く。

念願叶って今の部署に異動したのは、去年の秋の人事でのこと。

今の部署でミスらしいミスをした記憶もないし、時ノ杜設計に入社して三年目の二月という微妙なタイミング。しかも内々の打診もなく、奇襲攻撃の如く貼り出された辞令に、先週の嫌な記憶が蘇る。

「やで、阿賀津専務にケンカ売ったらあかん言うたのに」

「ケンカ……は、売ってないよ」

それに里穂が刃向かった相手は専務ではない。

社内で社長派と勢力を二分する専務派の筆頭で、専務の甥でもある阿賀津輝雄チーフが、新入社員にセクハラまがいの発言をしているのを目にして、見て見ぬ振りができずに止めに入っただけだ。

そんな里穂の意見に、いずみはそれで十分だと首を横に振る。

「アンタ、もとから阿賀津チーフの誘いを断って恨みを買ってたし、先週の一件が決定打になったんちゃう？」

「誘いを断ったって……」

女好きで知られる阿賀津チーフに、仕事上では関係ないのに、ある日突然食事に誘われた。しかもそれがかなり上からな感じだったので、今の時代そういった食事の誘いは、パワハラ兼セクハラだと懇切丁寧に説明しただけだ。

「アンタ、黙っとつたら可愛いのに」

残念だと、いずみは項垂れて眉間を指で押さえた。

「私は正しいことを言っただけだよ」

だから自分は間違っていないと胸を張る里穂の隣で、しばし眉間を指で押さえていたいずみは、「あれ？」といった感じで、顔を上げて掲示板の辞令を見る。

「なあ、里穂。そもそも、ウチに特別企画部なんて部署あったっけ？」

気を許している人の前では未だに関西訛りで話すいずみの言葉に、里穂も改めて貼り出された辞令を見た。

時ノ杜設計には企画、建築、土木といった部署があり、その中でさらに幾つかの課が設けられている。企画部には第三課まであるが「特別企画部」なんて聞いたことはない。それに気付いて、フツと体から力が抜ける。

「なんだ。悪戯か」

こんなところに貼り出すなんて、冗談だとしてもタチが悪い。本気で戦慄が走っただけに、冗談だとわかった途端、怒りよりも笑いが込み上げてくる。

里穂の隣で、いずみも安堵した様子で息を漏らした。

そして二人で視線を合わせて肩をすくめた時、背後から意地の悪い声が聞こえてくる。「特別企画部ってのは、すぐになくなることを前提に急拵えて作った部署だよ」

その声に振り向くと、整ってはいるが意地の悪い顔をした男が立っていた。身長がかなりある上に、傲慢な雰囲気をも漂わせているため、近くにいるだけでかなりの威圧感がある。

彼こそが、専務の甥にあたる阿賀津輝雄だ。

虎の威を借る狐の如く、次期社長と目される専務の身内であることを笠に着て、傲慢な振る舞いを繰り返して、一度目を付けた相手を徹底的にいじめ抜く悪癖の持ち主だ。

「阿賀津……チーフ」

呼び捨てにしてやりたいところを、渋々語尾に役職をつけて名前を呼ぶ。そんな里穂の反応に、阿賀津チーフは片方の口角を意地悪く持ち上げて歪に笑う。

「新規プロジェクトに向けて、短期契約で雇用した社員のために用意した部署だ」

「短期契約の社員さんのために、わざわざ新しい部署を用意したんですか？ アドバイザーとかやなくて？」

思わずといった感じで、疑問をそのまま声に出したのはいずみだ。

その言葉に、阿賀津チーフは顎を軽く上げる。そうすることで、彼の傲慢さがいっそう際立つ。

「お前らなんか詳しく話す気はないが、俺はすぐにいなくなると睨んでる」つまり、短期というのは、阿賀津チーフの一方的な見立てということだ。

だとすれば、この話にどこまで信憑性しんぴやうせいがあるかわかったものではない。しらけた視線を向ける里穂に、阿賀津チーフが苛立いらだった声で言う。

「異動が気に入らないなら、さっさと会社を辞めることだな」

阿賀津チーフに睨にらまれ、いずみは視線を落として首をすくめる。だけど里穂は、その程度の威嚇いごうで黙る気はない。

「会社を辞める気はありません」

「好きにしろ。泥舟の上で、俺に楯突たもといたことを後悔するんだな」

そう吐き捨て、阿賀津チーフはその場を離れていく。

会社を私物化するようなこんな人事、許されるはずがない。

「……」

組織人として出された辞令には従うしかない状況に、悔しさが込み上げてくる。

貼り出された辞令へと視線を向ければ、自然と眉尻まゆすじが下がってしまう。

「受験資格が取れるって、喜んだったのに」

同情するいずみの言葉に、ますます里穂の眉尻まゆすじが下がりそうになる。

いつか自分で大きな設計を手掛けることを夢見る里穂は、一級建築士の資格取得を目指している。だが、受験資格を習得するためには一年の実務経験が必要なのだ。

そのため入社以来ずっと異動願いを出し続け、ようやく実務のできる建築部への異動

が叶った。それからまだ半年も経っていない。

このままでは受験資格習得のタイミタイムングが遠のく一方だろうけど……

「でも、自分が間違ったことをしたとは思ってないからいい」

軽く首を振った里穂は、感情を立て直して言う。

自分が正しいと思う道を選択していけば、正しい場所にたどり着ける。それは、里穂の信念とも言える価値観だった。

里穂の言葉に、笑みを浮かべたいいずみだけれど、すぐにまた表情を曇らせる。

「会社、辞めたりせえへんよな？」

一級建築士の受験資格のことだけを考えれば、その方が近道になるかもしれない。だけれど、不安そうないずみの言葉に、里穂は大きく首を横に振った。

「あんなバカのために、辞めるわけじゃないじゃん」

そんなことをすれば、阿賀津チーフの傲慢さを助長させることになるではないか。

「そうやな。憧れの王子様に再会するために、頑張ってるんやもんな」

心が折れていない様子の里穂を見て安心したのか、いずみがからかってくる。

「そういうわけじゃないけど……」

ついで、そう否定してしまうが、里穂が建築業界で仕事をしたいと思うきっかけをくれたのは、かつてこの会社で働いていたある人の影響だった。

その人は、里穂が就職するずっと前に時ノ杜設計を去っているので、この会社で仕事をしているからといって再会できるわけではない。

それでも、建築業界で仕事を頑張り続けることで、いつか彼と一緒に仕事ができたらいいという願我也有。

叶えたい夢があるのに、あんな人間に屈するような形で、せつかく入った時ノ杜設計を辞めたりしない。

「悔しいけど、仕事だから頑張るよ」

背筋を伸ばし、貼り出された辞令を挑むような思いで睨んでいた里穂は、ふと自分の辞令の上に貼り出されている紙に気付いた。

自分の辞令に気を取られ、まったく目に入っていなかったが、社長の名の下、素っ気ない文章で新設部署立ち上げの報告と共に、その部署を任される部長の名前が書かれている。

その名前に、里穂は息を呑み、大きく目を見開いた。

——特別企画部長 時枝一樹。

その人物こそ、里穂が長年憧れてきた人であった。

1 ハニートラップ

株式会社時ノ杜設計——その歴史は昭和初期、ヨーロッパで建築を学んだ創業者時枝正次郎（しょうじろう）が立ち上げたことに始まり、創業時よりデザイン性と快適な住環境の共存を理念に展開して、今では日本を代表する大手設計会社にまで成長した。

現在は創業者の息子である時枝雅近が社長を務めているが、高齢のため、次期社長の座を巡った覇権争いが上層部で繰り広げられており、どちらの派閥につくかでその後の人生が変わると社員の間で囁かれている。

里穂にそんな社内事情を教えてくれたのは、友人のいずみだ。

自称情報通、正しくは嗜好きの彼女曰く、有力な社長候補は、専務の阿賀津博武（ひろたけ）と、現在子会社に向向している社長の息子の執行役員の時枝司（しんじ）の二者に絞られているが、社内留まっている専務が優勢とのことだ。

社長派の勢いが精彩（さいさい）を欠く理由の一つに、社長の孫であり、司執行役員の息子である時枝一樹が会社を離れていることがあるようだ。

大学の建築学科に在籍中に若手建築家の登竜門とも言われる賞を受賞し、時ノ杜設計

に就職後も建築業界のサラブレッドと評されてきた。そんな彼は、就職から五年後、突然独立して自分の事務所を立ち上げ、現在では日本を離れてイタリアで仕事をしているという。

それを、時ノ杜設計を見限ったと受け取った社員も多かったため、社内では阿賀津専務やその甥の阿賀津チーフの顔色を窺う風潮が漂っている。

これまで里穂も、いずみと共に専務の派閥に属していた。

それは別に将来を見据えた選択ではなく、辞令を出された先が、たまたま専務の取り巻きである古橋が部長を務める建築部の所属であったからにすぎない。

権力者の顔色に合わせてすぐに発言を変える日和見な古橋が、阿賀津チーフの怒りを買った里穂を庇^{かば}つてくれるはずもなく、自分にまで被害が及ぶのを恐れて、早々にこの異動を承認したらしい。

自分の置かれた状況に、最初は悔しさを感じていた里穂だが、異動先の特別企画部で自分たちスタッフを出迎えた新しい上司の前に、妙なことになっているのではないかと訝^{いぶ}る。

「特別企画部の部長を務めさせていただく、時枝一樹です。よろしくお願いします」

里穂をはじめとした五人のスタッフの前に、彼、一樹はそう挨拶^{あいさつ}の言葉を口にした。

長身の彼は、着る人を選びそうな細身の三つ揃いのスーツを粋に着こなし、スタイル

の良さを存分に表している。

スーツの着こなしだけでなく、頬から顎にかけてすっきりとしたラインを描く面長の端整な顔は、形のいい切れ長の目や綺麗に通った鼻筋で少しの隙もない。

整いすぎて冷たい印象を与えそうなものだけど、薄い唇に浮かんだ親しみのある微笑みが見る者の心を捉^{とら}えて離さない。

「再就職と同時に部署を任される自分に、不満を持つ者もいるかもしれないが……」

柔らかなトーンの声が、里穂の耳に心地よく馴染んでいく。

——間違いない、時枝さんだ。

憧れの人が目の前にいることが信じられない気持ちで、里穂は記憶の中の彼を思い出す。

昔、無造作に伸ばしていた髪はサイドを短く整えて、少し癖のある髪を右寄りで分けている。

自分に自信が持てず進路に迷っていた学生時代、里穂はワークショップで講師を務めていた一樹の話に勇気もらい、そんな彼が最初に勤めた時ノ杜設計で働きたいと思っ

て就職したのだ。

年齢は確か里穂より一回り上だから、今は三十七歳のはずだ。ワークショップで見かけた頃に比べると、大人の色気が増した気がする。

建築家を目指すと決めた時、もし叶うのであれば、いつか彼と一緒に仕事がしたいと願っていたけれど、叶わない夢だとも思っていた。

なにせ相手は、世界を股にかける有名建築家なのだ。

それなのに、嫌がらせとしか思えない辞令の先に、こんなサプライズが待っていたとは……

「以前、この会社に勤めていたこともあるので、ご存じの方かもしれません。社長の時枝雅近は私の祖父です。その祖父の意向で十年ぶりに時ノ杜設計に戻ってきたのは、それなりの覚悟があつてのことです」

どこかふわふわした思いで彼を見つめていた里穂は、その言葉に一気に気持ちが引き締まる。

何故ならそれは、一樹が現在練り広げられている時ノ杜設計の覇権争いに参戦するという決意表明だったからだ。

これから、社内の勢力図が大きく塗り替えられることになるだろう。

この場にいる他のスタッフも、里穂同様、彼の言葉に気を引き締めたのが伝わってくる。一樹はそんなスタッフ一人一人の表情を確認していく。

「……ッ！」

彼と視線が重なっただけで緊張する里穂に、一樹は柔和な笑みを添えて「よろしく」

と挨拶し、すぐに他のスタッフへ視線を巡らせる。その後、スタッフ一人一人の簡単な紹介を始めた。

特別企画部に配属されたスタッフは、一樹と里穂の他に、男性が四人。

眼鏡をかけ、左に偏つて生えている部分白髪が特徴的な五十代か四十代後半といった感じの男性は谷。肩幅が広く、いかにも学生時代スポーツをしていましたといった感じの厚みのある体つきをした男性は柴崎。一樹ほどではないが整った顔立ちをして、存在感のある長身の男性は南野。眼鏡をかけ柴崎と対極のような細くてなで肩の男性が友辺。見た感じの印象では、谷だけかなり年齢が離れているが、一樹と柴崎と南野は同い年くらいで、友辺がその少し下といった感じだ。といっても全員、里穂より年上で、熟達した貫禄を醸し出している。

淀みなくスタッフの紹介をしていた一樹が、里穂に視線を留めて、考えるように拳を唇に添えた。

「えっと……」

「浅葉里穂さん、建築部第三課からの異動です」

言葉を探すようにデスクの書類に視線を落とす一樹に代わり、谷が里穂を紹介する。その言葉を聞いた瞬間、室内に妙な緊張感が走ったのは気のせいだろうか。

それに、前の所属部署を告げられたのも里穂一人だ。

どことなく居心地の悪いものを感じつつ、里穂は頭を下げて挨拶をする。「若輩者ですが、皆様の足を引っ張らないよう努力いたしますので、よろしくお願いいたします」

きつとこの場にいる全員が、かなり仕事のできる人たちなのだろう。

そんな中で働けることは、いい経験になるに違いない。ここで得た知識は、この先の仕事にきつと役立つはずだ。

その上、遠い憧れの存在と想っていた一樹と一緒に仕事ができるなんて。

やる気いっぱい顔を上げた里穂だが、周囲の眼差しはどこか冷ややかだ。

扱い方がわからない異物を観察するような眼差しを向けてくるスタッフの中で、一樹一人だけが歓迎の意を示してくれる。

「期待しているよ」

「はい。頑張ります」

差し出された一樹の手を、里穂はしっかりと握り返した。



「異動先、どう？」

突然の辞令から半月、ランチに誘ってくれたいはずみに問いかけられ、里穂は微妙な顔でエレベーターの階数表示を見上げた。

「う〜ん」

自分たちのいるフロアへ昇ってくる階数表示を見つめながら唸り、エレベーターの扉が開いたタイミングで「微妙」と返した。

「やっぱ、他の人も左遷なん？ それ、空気悪そうやもんな」

混雑するエレベーターに乗り込みつつ、いずみが言う。

「そういうのとも、ちょっと違うんだけどね……」

同情的な顔をするいずみへ視線を向け、里穂は特別企画部へ異動してからの日々を思い返した。

半月間働いてみてわかったことだが、一樹を含めた里穂以外のスタッフは、今回の異動の前から面識があったらしい。

きちんと言葉で確認したわけではないが、漏れ聞こえてくる会話を繋ぎ合わせると、

一樹と南野は元は気心の知れた同期で、柴崎は二人の先輩にあたるらしい。

一人年の離れた谷は、時ノ社で一樹が働いていた頃、一緒に大きなプロジェクトを成功させたことがあるようだ。そして里穂に比較的年齢の近い友辺も、事前に何度か一樹

と顔合わせをしていたらしい。

つまりあの日の顔合わせで、スタッフと初対面だったのは里穂一人だった。それがわかれば、里穂の紹介で言葉を決まらせた一樹にも、里穂だけ異動前に所属した部署を紹介された理由にも納得がいく。

そしてそのせいなのか、里穂は他のスタッフとの間に、妙な距離を感じていた。

別に邪険に扱われているとか、不当な扱いを受けているとかではない。ただなんとなく、警戒されているようで居心地が悪い。

たとえば、資料を広げて意見を出し合っている柴崎と南野を見かけて近付いたら、慌てて資料を片付けられたり、部材の単価計算をしている友辺を手伝おうと声をかけても無視されたりするのだ。

そんな柴崎たちの態度をフォローするように、谷が里穂に仕事を割り振ってくれるのだけど、別に急ぐ必要もない雑用ばかり。

「なんか、私に仕事内容を知られないように警戒しているみたいで、居心地が悪いんだよね」

職場近くのお店で昼食を取りつつ、部内の様子を口にした里穂はため息をつく。

「それ普通に考えたら、ちゃんと仕事を覚えられへんやろうと思って、教えるのを面倒がっただけやない？」

「う……ッ」

そう言われると、返す言葉がない。

確かに、最初に感じたたとおり、谷をはじめとした自分以外のスタッフは、実力もキャリアも確かな人ばかりで、まだまだ新米の域を出ない里穂を警戒する理由なんてない。

教えるのが面倒だから関わりたくないという、いずみの意見には納得がいく。だけど言葉で表現することのできない空気が、警戒されていると感じるのだ。

それをどう説明しようかと思案していると、いずみがテーブル越しに身を乗り出した。きた。

「そんなことより、憧れの王子様とは、どんな感じなん？ 優しく指導してもらって、キョんキョんするようなことあったんちゃう？」

目を輝かせているいずみに、今日のランチのお誘いの目的はそれだったのかと理解する。

自称情報通で噂好きのいずみは、噂話の中でも特に恋バナが大好きだ。

情報通を名乗るのであれば、創業家の人間である一樹に対して、もっと優先的に話題にすべきことがあると思うのだけど、彼女が一番に気になっているのはそこらしい。

興味津々のいずみの表情に、新人研修で意気投合したからといって、バカ正直に憧れの王子様の名前を教えるんじゃないかなかったと過去の自分を叱りたくなる。

でもその頃の自分は、すでに時ノ杜設計を去った一樹がまさか復職するなんて思ってもいなかったのだから仕方ない。

ましてや自分が、その部下になるなんて夢にも思わなかった。

「部長との関係は……微妙」

しばし記憶を巡らせ、里穂はそう返す。

自分にとっての一樹は、これまでは雑誌やネットの向こう側、別世界ともいえる場所にいる遠い存在だったのだ。そんな彼を間近で眺めることができるだけでも奇跡である。嫌がらせの人事異動から一転した夢のような状況に、つい彼の動きを目で追ってはニマリしそうになるのを、奥歯を噛み締めて堪えるのに大変苦慮している。

せっかくなら、彼に教えてほしいことがたくさんあるのだけど、他のスタッフが里穂が一樹に近付くのを妨ぐように間に入ってくるので、接点を持たないまま今日まで過ごしている。

「大事な御曹司に、アホが移ると困ると思われとるんちゃう？」

「失礼な」

不満げに目を細める里穂だが、内心では否定しきれないものもある。

一緒に働くスタッフの中でも特に谷と柴崎は、一樹をすでに次期社長と見定めているような節があり、それに近いことは思っているかもしれない。

異動初日、決意表明をする一樹の姿に心がざわめき、彼のために仕事を頑張ろうと思っただのは、柴崎たちと変わらない。だけどいざ仕事が始まると、里穂だけ圧倒的に実力が不足していると思われ知らされた。

「仕事、辞めたくなった？」

悔しさで奥歯を噛み締める里穂に、いずみが聞く。その口調は心配しているというより、こちらの覚悟のほどを確かめているといった感じだ。

だから里穂も、挑むように眉を上げて強気に笑う。

「まさか、せっかくのチャンスだもの。私が力不足で仕事を任せられないって言うなら、任せてもらえるように努力するだけだよ。そのために、まずはできることから頑張っていく」

そう宣言して、里穂はランチプレートのから揚げにかぶりつく。

「里穂らしい意見やね。頑張って、憧れの王子様との距離を縮めなね。応援しとく」
安心したと頷いて、いずみも食事を始めた。



「どうした？」

打ち合わせを兼ねた昼食を取ろうと部下二人とエレベーターホールに向かっていた一樹は、前を歩く柴崎が廊下の角を曲がりかけて身を引いたので立ち止まった。

「いえ別に……」

言葉を濁しつつも、大柄な体を無理やり隠そうとしているのだから、『別に』のわけがない。

いい年をした大の男がなにをしているのだという思いから、柴崎を追い越して角の向こうを見る。そこには、エレベーターの到着を待つ部下の姿があった。

「浅葉君じゃないか」

思わず呆れたような声を出す。里穂はこちらに気付くことなく、同僚らしき女性と連れ立ってエレベーターに乗り込んでいく。

背後で柴崎が「だからですよ」と一樹の腕を引っ張り、壁の陰に隠そうとする。

その過剰反応が煩わしくて、一樹は大きく肩を回して柴崎の手を振り払った。

「午後も部署で顔を合わせるのに、わざわざ隠れる意味があるのか？」

敢えて挑発するように問うと、学生時代から武道を続けている柴崎は荒い息を吐く。

「あんな小娘相手に、臆するわけありません」

相手が自分なので柔らかな口調を保っているが、その顔にははつきり心外だと書いてある。

年齢ではなく、相手の人間性を見て扱いを判断する柴崎は、後輩な上、出戻りの身である一樹に対して当然のように敬意を払った接し方をしてくる。

無骨なまでのその生真面目さには感謝しているが、里穂に対する態度がその存在を認めていないように感じられて気になっていた。

「なら避けたりするな。見ていて気分が悪いぞ」

いいタイミングなので、そう釘を刺してエレベーターへ足を向ける。

里穂が乗り込んだエレベーターはすでに扉が閉まり降下し始めているので、柴崎たちも素直にその後に従う。

「そうは言っても、彼女は専務派の筆頭とも言える建築部の古橋の部下だったんだぞ」柴崎の振る舞いを正当化するように口を挟むのは、同期だった南野だ。一樹を上司として認めてくれているが、同期の気安さで今も変わらずフランクな口調のまま接してくる。

ここまで黙って話を聞いていた南野も、考えとしては柴崎と同じらしい。ますますくだらないと頭を掻いた一樹は、二人を軽く睨んだ。

「だから彼女が、阿賀津専務のスパイだと？」

一樹の時ノ杜設計復帰のために用意された特別企画部の立ち上げメンバーに、当初、浅葉里穂は含まれていなかった。

社内で勢力を伸ばす阿賀津専務を牽制^{けんせい}するため、一樹は祖父である社長に呼び戻された。その布石となる特別企画部のスタッフは、一樹自身も面接に加わって厳選してきた。ところが始動直前になって、決定したスタッフのうちの三人が退職という形で離脱したのだ。

彼らの退職に専務派が絡んでいることは容易に推測できたが、それを明らかにしても詮^{せん}無いことだし、一樹自身、理由がなんであれ、離脱した奴に興味はない。

残ったスタッフは皆優秀なので、わざわざ新たなメンバーを迎え入れる必要はなく、そのまま自分を含めた五人のスタッフで始動させる気でいた。だがそこに、阿賀津陣営が若手育成という名目のもと、里穂を送り込んだのだ。

一樹としては、それならそれで構わないのだが、他のスタッフはそうは思わなかったらしい。

里穂のことを専務サイドのスパイではないかと警戒し、ろくに仕事をさせないどころか、過剰なまでに距離を取っている。

「彼女の異動は、阿賀津専務の甥である阿賀津チーフの後押しによるものと聞きますし、用心するに越したことはないです」

「確かに、やたらとこちらの仕事に関わろうとしてくるし、難しい顔でお前の動きを目で追っているのは俺も気になっているが」

「だからスパイだと？」

——そんなわけがあるか。

真顔で忠告してくる柴崎と南野に心の中で毒づく。

阿賀津専務の嫌がらせを過剰なまでに警戒するこいつたちのおかげで、部署立ち上げから半月ほど経った今も、里穂と会話らしい会話したのは数えるほどしかない。だが、その会話からでも、彼女がスパイとは到底思えなかった。

里穂は、慣れない環境で懸命に仕事を覚えようと努力し、質問を無視されても気を悪くすることなく、割り振られた雑用をきちんとこなす生真面目さがある。それだけでなく、周囲の言葉の端々^{はしはし}から必要になると察した備品や資料をさりげなく準備しておく気遣いもあった。

それだけ聡^{さと}い人間なら、自分が周囲に受け入れられていないことに気付いているだろう。それでも不貞腐^{ふてくさ}れることなく仕事に励^{はげ}む姿には好感が持てた。

そういう気概のある若手を育てるのは、上司の仕事だ。

もし彼女が皆の言うとおりのスパイだったなら、それは自分に人を見る目がなかったというだけだ。

「一緒に仕事をしていれば質問くらいするし、指示を与えてくれそうな人を探して視線を巡らせるのも普通のことだ。本気で彼女を疑っているなら、お前たちの目の方を疑

うぞ」

到着したエレベーターに乗り込みつつ、柴崎と南野を睨む。

とはいえ、こいつらが敵と認識した相手にどれだけ厳しいかを承知しているので、本気で里穂を疑っているわけではないのはわかる。だからこそ、彼女の扱いに困っているのだろう。

「本人に悪意がなくなるとも、その周囲まで無害とは限りません。悪意なく同僚と世間話をして、こちらの情報を漏洩する可能性だってあります。なにより、特別企画部のオフィスに入るにはスタッフのICカードが必要ですからね。子飼いのスタッフを一人紛れ込ませておくだけでも専務派のメリットはあります」

そう返すのは、一緒にエレベーターに乗り込んできた柴崎だ。

全ての部署がそうというわけではないが、特別企画部のように機密性の高い情報を取り扱う部署には、電子ロックがかかる扉が採用されている。

しかし社内のことなので、やろうと思えばスタッフ以外の者が入室する方法はある。そのことを口にする暇を与えず、南野が続けた。

「あの悪意のなさそうな感じが、こちらを油断させるための罠という可能性もある」

その表情を見る限り、南野は生真面目な柴崎の警戒心を煽って面白がっているのだろう。

悪ふざけがすぎる南野を睨むと、彼は詫びるように肩をすくめるが、瞳に悪ガキの光を宿したまま続ける。

「もしくは、お前を籠絡するためのハニートラップとか」

「は……？」

想定外の言葉に、妙な息を漏らしてしまう。

それこそあり得ない話だ。

浅葉里穂は、姿勢が良かったためか、それほど華奢な印象は受けられないが小柄で細身な体つきをした女性だ。それでいて、強い意思を宿した形のように二重の目が印象的だった。

全身から生きたエネルギーを溢れさせ、自分にできる仕事はないかと、あれこれ他のスタッフに確認して回る姿は、好奇心旺盛な子猫を思わせる。

パーマをかけた明るい色の髪はバレッタでまとめていることが多く、ほっそりとした首筋が強調されていた。

あと数年もすれば人目を引く美人に成長するかもしれないが、一樹にとっては、まだまだお子様の範疇を超えていない。そんな小娘相手に、南野の言うようなことが起こるわけがない。

その辺の感覚は柴崎も同じなのだろう。奇妙なものを見るような顔で南野に視線を向けている。

「なんなら、俺が確かめてやろうか？ 色仕掛けには色仕掛けで返せばいい」

南野は女の扱いに長け、散々浮名を流してきた男だった。

つまりは、里穂を口説く口実が欲しいのだろう。

上司として、見るからに初心そうな部下が悪い男の毒牙にかかることを容認できるわけがない。

「高い慰謝料と引き換えにめでたく独身に戻ったんだから、お前が遊ぶのは大いに結構だが、俺の部署ではやめてくれ」

一樹自身、本気の恋愛とは縁遠い暮らしをしている。

だから南野を叱れるような立場にはないのだが、遊ぶ相手を選ぶ節度くらいは持ちあわせている。

見るからに恋愛に奥手そうなうえ、直属の部下などは問題外だ。

そうこうする間に一階に到着したエレベーターの扉が開き、一樹はそこからフロアに出た。

会社での主導権を握るため、今が大事な時期であることは承知している。専務派の妨害を警戒して、必要以上にスタッフが神経を尖らせていることもわかっていた。

しかしだからといって、疑心暗鬼に駆られた結果、部署内で問題を起こされては敵の思いつぽだ。

後に続く二人を待つ間、フツと心に閃くものがあった。

「ではこうしよう。彼女の真意は俺が探る。ハニートラップだと言うのならそれもよし。もし本当に専務サイドのスパイなら、逆にこちら側に取り込めばいいだけだ」

人差し指を一本立てて、一樹は不敵な笑みを浮かべる。

「しかし……」

驚いた柴崎が反論するのを許さず、そのまま言葉を続ける。

「彼女を懐柔するのに、俺では不足とでも言いたいのか？」

そう言われたら、柴崎に返す言葉がないのは承知の上だ。ついでに言えば、南野が変な気を起こさないよう、牽制することもできる。

周囲の里穂への態度が象徴しているように、現在の特別企画部は異物を排除しようとする動きが強すぎる。

確かに危険なものが入り込むリスクはなくなるかもしれないが、いい仕事ができる環境とは言いがたい。

それが我慢ならぬのだ。

だから他のスタッフが彼女の扱い方を決めかねているのであれば、自分が介入するこ
とで流れを変えたい。

「これは決定事項だ」

そう宣言して、一樹は顎の動きで二人についてくるように促して歩き出した。



いずみと昼食を取ったことで気分転換をした里穂は、気持ちを切り替えてオフィスに戻った。

「……あれ？」

昼の休憩が終わるギリギリに戻ってきたのだが、オフィスは空だった。

谷と友辺は午前に出かけたきり戻っていなかったが、里穂が昼食に出かける時はまだオフィスに残っていた一樹たちの姿もない。

会議など、全員で対応すべき業務を見落としていたのではないかと不安になり、里穂はそれぞれの予定を書き込んでいるホワイトボードへ視線を走らせた。でも谷と友辺の名前の欄に外出を告げる言葉がある以外、なんの予定も書かれていない。

そのことに安堵するが、すぐに予定を書き込む暇がないほど急な事態が発生したのではないかと不安になる。もしくは、あまり考えたくはないが、自分だけ大事な情報から遮断されているという可能性もある。

部署で一人浮いた存在となっている里穂としては、なにも書かれていないホワイトボードを眺めていると、胃の底がざわついてしまう。
 なにかヒントになるようなものはないかと、他のスタッフのデスクへ視線を走らせる。几帳面そうな谷と友辺のデスクの上はきちんと整頓されており、参考になりそうなものはなにもない。逆に柴崎のデスクは、会社が推奨するペーパーレス化に逆らうかのようには書類が溢れていて、下手に触れば積み上げた資料が雪崩を起こしそうで近寄りた。

南野のデスクは数枚の資料が出しっぱなしになっているが、求めているような情報はなさそうだ。
 里穂は部屋全体を見渡せる位置にある、他より一回り大きなデスクへ視線を向けた。部長である一樹は、同じフロアで働くようになった今も近寄りた存在で、彼が使用するデスクに対しても同じように感じている。

「……」

里穂は、午後の業務の指示を受けていない。このままやることもなく一人取り残されているよりはと、覚悟を決めて一樹のデスクへ近付いた。

よく考えれば、彼のデスクをきちんと見るのは、これが初めてかもしれない。

疾しいことにはないのに妙な緊張感を覚えつつ一樹のデスクを観察すれば、物が少ないデスクの上で、一束のファイルとそれを押さえるガラス細工のペーパーウェイト

が目を引いた。

仕事中は耳にした記憶のない学校名の後に『跡地再開発プロジェクト』と書かれたフアイルの上に置かれたそれは、球体で下半分が透明感のある青色をしており、中に銀色の粒子が渦を巻くように舞っている。その中央には、気泡が一つ浮かんでいた。

なんとなく夜空の瞬きまたを連想させる繊細なガラス細工には、見ている者の心を捉える引力のようなものがある。

「綺麗……」

まるで球体の中に閉じ込められた手のひらサイズの宇宙のようで、感嘆の息が漏れた。思わずその表面にそっと指を滑らせると、ガラスの手触りは硬く滑らかで、当然その内側の煌めきに触れることはできない。

——なんだか、部長みたい……

人を惹きつけてやまない強烈な存在感を放っているのに、触れることは叶わない。現実の距離感にもどかしさを覚えて、無意識にため息を吐く。

ペーパーウェイトの表面に指を触れさせているうちに、ふと『みずをきくすればつきてにあり』という言葉が胸に浮かぶ。

まるで呪文のようなその言葉を初めて耳にした時のことをほんやり思い出していると、オフィスの扉が開く気配がした。

気配に反応して視線を向けると、一樹と柴崎と南野の三人が扉の前に立っている。

「お前、そこでなにをしているっ！」

抑えてはいるが、怒気をはらんだ声を放ったのは柴崎だ。

「えっと……その……」

生真面目そうな柴崎は、おそらく勝手に人のデスクのものに触れていた里穂に腹を立てているのだろう。そんな人を相手に、一樹のペーパーウェイトを撫でつつ彼を思っていたなんて恥ずかしくて言えるはずがない。

里穂がしどろもどろになって言い訳の言葉を探していると、柴崎の苛立ちが増す気配を感じた。

そうなってしまうと、ますます言葉が出てこない。

今にも怒鳴り出しそうな柴崎と立ち位置を入れ替わるように、一歩前に出た南野が優しい口調で問う。

「柴崎さんは、君がさつき一緒に出かけたお友達に、なにか言われたり頼まれたりしなかったか、心配しているのだよ」

「いずみに……ですか？」

何故、いずみと食事に行ったことを知っているのだろうと思いながら、里穂はフルフルと首を横に振る。

咄嗟^{とつさ}のことで素の表情で返してしまった。

見れば柴崎は、毒気を抜かれたような顔をしている。それで慌てて説明を付け足した。「戻ったら誰もいなかったの、なにをしたらいいのかわからず、できることはないか探していたんです」

正しくは、自分だけ仲間外れにされているのではないかと焦っていたのだけど、それをそのまま言葉にするのも恥ずかしいので、その程度の嘘は許していただきたい。

「なにも指示を残さず、休憩時間を過ぎて戻ってきた私たちが悪いな」

柴崎の肩を軽く叩いて一樹が言う。

一樹は南野の肩を引いて後ろに下がらせると、そのまま里穂へ歩み寄る。

そして里穂の前に立つと、蜜を溶かし込んだような甘く魅惑的な微笑みを添えて、「悪かったな」と詫びた。

「——っ！」

本人としては何気ない仕草なのかもしれないが、これまで同じフロアにいても、遠目に盗み見ることに気付き、微かに眉根を寄せた。

それは隙があれば彼を盗み見てきた里穂だから気付ける一瞬の微妙な変化で、里穂に視線を向ける時には、表情は至って紳士的なものに戻っていた。

「なにか面白いものでもあったかな？」

問いかけながら、一樹は里穂の手に自分の手を重ねる。

彼の手に押され、里穂は手のひら全体でペーパーウェイトを包み込む形となった。

「部長、あの……っ」

手のひらで硬質なガラスの冷たさを、甲では大きく男性的な一樹の手の温もりを感じている。その相反する感覚に混乱し、距離が縮まったことで彼の香りを強く感じた。

上品でどこか日本の香^こを連想させる香りは、彼の色気を引き立てるエッセンスとしての役目を十分に果たしていて、里穂は緊張して息をするのも辛くなる。

顔が熱いし、自分の鼓動がうるさい。

手が触れただけでここまで過剰反応してしまう自分が、彼の目にどう映っているかと考えると居たたまれなくなる。

逃げ出したい衝動に襲われるが、手を押さえられているので、彼と距離を取るときさえできない。

一樹は、慌てふためく里穂の反応を味わうように目を細めた。何気ないその表情にも、大人の男の色気に溢れているので困る。

「私のデスクに、興味をそそるようなものはあったかい？」

悪さをした子供を窘めるような余裕を含んだ声。それでいて、どこかこちらをからかっているようにも聞こえる。

しかも、彼の甘く掠れた声で囁かれると、鼓膜だけでなく、脳を直接くすぐられたみたいに錯覚してしまう。

彼には、人の心を酔わせる毒があるのではないかと疑いたくなるほど強烈な存在感に、頭がくらくらする。

自分が極度の緊張から酸欠に陥っていると気付いたのは、急な眩暈に襲われて彼の胸に頬をぶつけた後だった。

三つ揃えスーツのベストやワイシャツ越しに感じる彼の胸板は、硬いと感じるほど鍛え上げられている。思わず一樹の引き締まった体を想像して赤面してしまった。

「あの……すみませんっ……そのっ」

慌てて傾いた姿勢を立て直すけれど、思考が空回りして言葉が出てこない。

一樹は、里穂の挙動不審な態度に気を悪くする様子もなく、からかうように問いかける。「口では言えないようなことに、興味でも？」

触れる指先の感触や甘く囁く声、上品でありながら強い存在感を誇示する香り。その全てが、彼は女性の扱いに慣れているのだと告げてくる。

恋愛経験皆無の自分が不用意に近付けば、痛い目に遭う——理性がそう警鐘を鳴らす反面、女としての本能が、そんな彼に身を委ねてみたいと訴えてくる。

女の本能に感情が傾きかけた時、視界の端に柴崎と南野の姿が見えて、自分が置かれている状況を思い出した里穂はハッと息を呑んだ。

「ま、まさかっ！」

慌てて理性を取り戻した里穂は、重ねられていた手から自分の手を引き抜き、一樹との距離を適切なものにする。

胸が上下するほど深い呼吸を繰り返して気持ち落ち着け、一樹を見上げた。彼は柴崎たちの方に視線を向け、なにかを問いかけるように軽く首をかたむけている。

そして困ったように肩をすくめると、里穂に視線を戻して口角を持ち上げた。その表情に、なにか悪巧みを楽しむ子供のような、はた迷惑な輝きを感じたのは気のせいだろうか。

「さっきの話だと、浅葉君は午後には任されている業務はないということか？」

「はい」

軽く頷いた一樹は、顎に拳を添えて少し考えてから聞く。

「ドローンのハンドリリスとキャッチをしたことは？」

ドローンを扱う際、平坦な地面がない場合は、人の手で離着陸をサポートすることがある。時ノ杜設計で使用されるドローンは統一機種で、側面に取り付けられているカメラに傷がつかないように保護するためのスキッドを使って行うのが基本だ。

「あります。風速計の見方もわかります」

前の部署で、雑用係として駆り出されたことがある。

「なら私の外回りに付き合え。写真に撮っておきたい場所があるから、その準備も忘れるな」

里穂が頷くと、一樹はオフィスの隅にある戸棚を示した。そこには、仕事用のドローンやデジカメなどの精密機械が収められている。

「部長、それなら私が……」

慌てた様子で柴崎が口を挟む。

「なら、お前が今抱えている業務を、浅葉君に任せるんだな」

一樹の言葉に、戸棚へと体を向けた柴崎の動きが止まる。

その隙に一樹は『ついてこい』と顎の動きで里穂を促すと、そのままオフィスを出て行く。

「はい」

短く返した里穂は戸棚に駆け寄ると、必要な機材をバッグに収め、それを肩から下げ一樹の後を追った。

突然の流れに戸惑ったけれど、今は任された仕事を全力で頑張るだけだ。

里穂がエレベーターホールへ駆けて行くと、そこで自分の到着を待っている一樹の姿があった。

「お待ちして……申し訳ありません」

重い荷物を抱えて走って来た里穂は肩で息をしつつ、荷物を床に下ろした。

腕時計を確認しながら待っていた一樹は、しゃがみ込んで荷物を確認する。

「バッテリーは？」

「充電は昨日帰る時にしておきました。センサー周りの確認とシステムのアップデートも、朝イチですてあります」

今日、谷と友辺が外出することは、ホワイトボードの予定表から承知していた。もしかしたら必要になるかもしれないと準備しておいたのだが、彼らがそれを持って出るところはなかった。

それをそのまま持ってきたので、準備は万全である。

「計器類やデジカメの他に、事故防止用の革手袋とゴーグルもあるな」

荷物が収められているバッグのファスナーを閉め、腕時計を再度確認した一樹は、「合

格」と頷いて立ち上がった。

「咄嗟にこれだけ準備できたら、新米としては合格点だ」

どうやら突然の指示は、里穂の実力テストだったらしい。彼に及第点をもらったことに安堵しつつ、素朴な疑問が湧く。

「不合格だったら、どうなっていたんでしょうか？」

里穂が運んできたバッグを肩に下げ、エレベーターのボタンを押した一樹は、チラリとこちらを見ると、階数表示に視線を移動させて少し考える。

ちよどここの階にエレベーターが停まっけて、すぐに扉が開く。

乗り込む瞬間、一樹は誘うような眼差しをこちらに向けた。

「それならそれで、このまま二人でデートするのも悪くないな」

「へ？」

予想外の言葉に、赤面してしまう。里穂のそんな初心な反応に楽しげに目を細めた一樹に「乗らないのか？」と聞かれ、里穂は慌てて扉が閉まり始めているエレベーターに飛び込んだ。

「おっ、危ないぞ」

置いて行かれては大変と、勢いよくエレベーターに飛び込んだ里穂の体を一樹が受け止める。

バランスを崩した里穂の腰に腕を回したかと思ったら、そのまま体の位置を入れ替えて里穂の体を壁に押さえ込んだ。思わぬ体勢に緊張していると、体を寄せた一樹が里穂の顔の横にあるコントロールパネルを押した。

「……えっ」

壁ドンからのキスといった、少女漫画のような展開を瞬時に思い浮かべてしまった里穂は、自分の勘違いが恥ずかしくなる。

「なにか期待したか？」

息を詰めて黙り込む里穂に、体を寄せたままの姿勢で一樹が尋ねてきた。

迫られているわけではないのだが、男の色気が溢れる彼にこの距離感で見つめられると、こちらの不均な妄想を見透かされてしまったのではないかと不安になる。

「部長、近いです」

これ以上の密着は耐えられないと、里穂は一樹の胸を押して訴える。

すると一樹は「失礼」と、軽い口調で謝り離れていく。だが表情に、こちらを誘うような色気を漂わせている。

それには抗い難い魅力を感じるのだけど……

「……もしかして、罰ゲームかなにかで、私を口説くように言われたんですか？」

これまでろくに口をきいたことのない相手が、今日に限ってやたらと大人の色気を振

り撒いて距離を詰めてくるのだ。しかも、そこに男女の熱情のようなものは微塵みじくも感じられない。

それに自分と一樹のやり取りを黙って見ていた、柴崎と南野の微妙な表情。

冷静にこの状況を分析した里穂は、どんな理由があれば彼がこんな行動を取るかと考え、その発想に思い至った。

彼を見上げると、一樹の表情から、香り立つような男の色気が抜け落ちていく。

その変化の速さに、やはり今までの言動は全て計算けいさんづくのものだったのだと納得する。

そんな里穂の様子を見て、一樹は楽しそうに目尻めじりに皺しわを刻んだ。

「俺に口説かれていたとは思わないのか？」

そう問いかける一樹の自称が、『私』ではなく『俺』になっている。おそらくこれが、彼の素なのだろう。

「残念ながら、口の身の程は承知しています。大人の部長が、私を口説くわけがないです」
事実なのだが、口にするとなんだか悲しくなる。

だが一樹は、自分とは反対に嬉しそうだ。

「聡明でなにより。正直俺も、このゲームには飽きていたから助かったよ」

なんでそんなゲームを……と尋ねる前に、エレベーターが一階に到着し、控えめなべルの音に続いて扉が開く。

「浅葉君を口説くつもりはないが、少しだけ距離を縮めたいとは思ってる」

エレベーターを降りた一樹は、振り返り、里穂に手を伸ばして言う。

「からかって悪かった。お詫びに仕事の後に美味うまいいものを食わせてやるから許してほしい。……詳しい話はその時にするから、とりあえず俺の仕事に付き合ってくれ」

悔しいが、屈託のない口調でそう話す一樹の表情は、先ほどまでの計算けいさんづくの色気あるものより、ずっと里穂の心を捉えた。

それこそ、里穂が一樹の容姿にだけ魅了めいりょうされて恋焦こいせうがれていたのであれば、戯れと承知で誘惑ゆうわくされていたかもしれない。

だけど自分は、一樹の容姿ではなく、仕事に惚れたのだ。

彼の軌跡きせきをたどり、少しでも彼の仕事を学びたいと願っている里穂は、「承知しました」と返して、一樹の背中を追った。

奇妙な流れで一樹の外回りに同行することとなった里穂は、その日の夕方、とある店のカウンターでぐったりしていた。

見るからに高級感が漂う白木の一枚板のカウンターに、頬を預けて脱力する勇氣はない。仕方なく椅子に深く座って、背もたれに体重を預けることで込み上げてくる疲労感をやり過ごす。

「そろそろ料理が始まるけど、飲み物はどうする？」

隣に座る一樹が、ドリンクのメニュー表を差し出してきた。

軋む体こしに力を入れて姿勢を整えた里穂は、メニューを受け取りながら隣を見上げる。

「部長は？」

そう尋ねた里穂に、一樹は「ここでその呼び方は無粋だ」と返す。里穂は思わず店内を見回した。

茶室の罫口はにばくちほどではないが、腰を屈める必要があるほど小さな戸口から入った店内は、京の町家を思わせる。カウンター席だけの店だがそれほど狭くはなく、壁際には大きな壺に絢爛な生花が生けられている。

カウンターの内側にも余裕があり、ワインセラーやビールサーバーの他、壁際の棚に旬の食材がデイスブレイされていた。

敢えて客席の数を絞り、贅沢ぜいたくな空間の使い方をしているのには、店側のこだわりがあるらしい。

一樹の話によれば、この店は完全予約制の天ぷら屋で、一日六人までしか客を受け入れないそうだ。しかも、食事の開始時刻からコースのメニューまで、すべて店で決められているのだという。

「えっと……」

そう言われても、呼び方に悩む。

困り顔で見上げてみると、彼が「一樹と、名前を呼び捨てにしても構わないぞ」と言う。

ニンマリ笑う彼の顔を見れば、からかわれているのだとわかる。

「では、時枝さんで」

無駄に色気を振り撒くのをやめた途端、こちらを子供扱いしてくるのはいただけじゃない。年齢差や立場の違いを考えれば当然なのだろうけど、里穂は彼の部下なのだ。対等な関係とまではいかなくとも、もう少し大人の扱いをしてほしい。

里穂のそっけない反応に、一樹はつまらなそうに肩をすくめる。

「で、なにを飲む？ 俺は車だが、酒が飲めるならこの梅酒はお勧めだ」

「では、それをいただきます」

ここでソフトドリンクを注文すると余計に子供扱いされそうなので、勧められたお酒を選ぶ。

軽く領いた一樹は、カウンターの向こうのスタッフに、梅酒のソーダ割りとノンアルコールのカクテルを注文した。

飲み物と共に先付が出される。

クエとハーブの梅肉あ和えは、薄くスライスされたミョウガの食感がいいアクセントになっている。それに梅酒のソーダ割りも、砂糖の甘さに頼ることなく、上品な梅の味が

して飲みやすい。

「お気に召していただけたようで、なにより」

カウンターの頬杖をついた一樹が、先付と梅酒を味わう里穂の横顔を眺めて言う。

「走り回って、喉が渴いていたので」

美味しいものを美味しいと喜ぶのは、子供っぽい反応だったかもしれない。

そう恥じる里穂の隣で、一樹が自分のグラスに口をつける。

「確かに、動き回った後に飲むと、格段に美味しいな」

軽く喉を上下させた一樹が、表情を輝かせて言う。

「時枝さんは、大して動いてませんよね」

素直な感情をそのまま口にした様子の一樹に、つい気持ちが解れて軽口を返してしまふ。

今日の撮影で操作を担当した一樹は、基本動くことはなく、ハンドキャッチを任された里穂だけがあちこち動き回った。しかも撮影に赴いたのは、全面リニューアルに向けて休館しているショッピングモールで、その駐車場を発着場所にして行うドローン撮影にハンドキャッチの必要は感じなかった。

なのに『しつかり捕まえろよ』と指示をされ、空中をあちらこちらに彷徨うドローンに翻弄された。

「フリスビーで犬と戯れる人の気持ちが変わったよ」

爽やかに笑うその一言で、今日の午後の業務に彼の悪ふざけが過分に含まれていたのだとわかる。

「なにを考えているんですか」

どれだけ操縦が下手なのだと思っていたが、あの不安定な動きは里穂をからかつてのものらしい。

捕まえようとするとフワリと上昇し、右に左にふら彷徨うドローンを追いかけて走り回ったことを思い出して里穂が眉を寄せると、一樹は楽しそうに喉を鳴らす。

仕事のできる大人の男といった感じの彼が見せる悪戯っ子のような表情は、ピターな焼き菓子に交ぜられた隠し味のフルーツのように、その魅力を引き立てる。

今日一日散々振り回された身としては悔しい限りだが、やっぱりいい男だ。

自分の中に自然と湧き上がる感情を認めるのは癢とばかりに、里穂は不機嫌な表情で梅酒の入った薄いグラスに口をつける。

美味しい梅酒にホッと気持ちいを和ませていると、そのタイミングを見計らったように一樹が口を開いた。

「適度に体を動かすレクリエーションに、美味しい食事、新しいスタッフと親睦を深めるにはちょうどいいだろう？」

確かに、彼とコンタクトを取りながら走り回ったことで、これまでのような緊張感はなく、随分リラックスした気持ちで彼の隣にいる。

ただの悪ふざけに思えたあの撮影にも、彼なりの思惑があったようだ。

「でも、ここは親睦会に使うには、格式が高すぎると思いますけど」

提供されるのがコース料理一種類のためか、店内にお品書きのようなものはなく、手渡されたドリンクメニューにさえ金額の表示はなかった。おそらく、請求金額を気にするような人は、この店を利用しないのだろう。

それだけでもいかに格式の高い店であるか、想像できて怖い。

里穂が難しい顔をしている間に、一品目の天ぶらが提供される。

二つの鍋を行ったり来たりしていた板前さんが、揚げたての天ぶらを皿に載せる際、「鱧はもです」と教えてくれた。

出されたものを断るのは勿体ないし、お店の人にも失礼である。そしてなにより、寒い中走り回った体はエネルギーを求めている。

里穂は「いただきます」と小さく手を合わせると、肉厚な鱧を箸はしでほぐして口に運ぶ。「今日の食事は、チームを代表してお詫びの意味を込めているんだよ」

口の中でほぐれていく白身魚を笑顔で咀嚼そじくしていた里穂の横で、一樹が流麗な仕事で箸を手にする。

立ち読みサンプル はここまで

「……？」

お詫びとは、さっきの柴崎が怒鳴ったことだろうか？ そんなことを考えていると、一樹が言う。

「これまでの仕事環境についてだ。異動してからずっと、仕事がいにくかったら？」

「ああ……」

「大人げない連中で悪かったな」

疎外感を覚える日々を思い出し、里穂が苦い顔をする。嘘のない里穂の表情を見て、一樹は緩く笑って天ぶらを食べた。

隣で一樹がサクリと衣を噛む音を聞きながら、里穂は首を横に振る。

「私力が不足だから、柴崎さんたちも仕事を任せにくいんだと思います」

柴崎たちの態度になにも感じないわけではないが、一方的に被害者面ひがいしめんするのは好きではない。

異動初日、一樹の決意表明を聞く彼らの顔は、闘志に溢れていた。

きつと、自分に対する周囲の態度は、一樹を思っていることなのだろう。

悪意や意地悪など理不尽な理由で里穂を排除しているのではなく、役に立たないと判断したことなら、それはそう思われる自分に問題があるのだ。

だったら、今は雑用でもなんでもして、自分の評価を高めていけばいい。